

越境する沖縄空手

—海外移住による普及と空手ツーリズム

桑原牧子

Makiko KUWAHARA

Crossing Borders with Okinawan Karate: Diffusion through Emigration and Karate Tourism

1. はじめに

沖縄空手は中国武術の影響を受けて発祥し、地域ごとに那覇手、泊手、首里手と特徴づけられ、それぞれが複数流派に分岐して発展した。空手は沖縄から本土に渡り競技化され、多岐にわたる経緯で国際化されたが、同時に沖縄を空手発祥の地とする認識や評価も高まった。沖縄県は2016年に空手振興課を設置し、2017年に沖縄空手会館を開館することで沖縄県内の空手振興に努めると共に、本土や海外の空手家の沖縄空手への関心に応える活動を行ってきた。さらに、沖縄空手をユネスコ無形文化遺産に登録する準備が進行し、沖縄での稽古を希望する海外からの空手家を誘致する「空手ツーリズム」にはコロナ禍では下火になったとはいえ、沖縄空手関係者のみならず観光業界も期待を寄せる。

沖縄を空手発祥の地として再認識するのは沖縄の空手家だけではない。本土流派の空手家や競技空手家のなかにも自らの空手の起源を各流派の枠を超えて沖縄空手に辿る人々がいる。本稿は、沖縄空手が沖縄内外で空手の起源として独自の価値を再確認されたり新たに付与されたりする過程を空手家の沖縄から海外へ、海外から沖縄への移動に着目しながら追う。まずは筆者の先行研究である仏領ポリネシアのイレズミの事例で文化と場所への視座を紹介した後、沖縄空手が本土空手や競技空手との関係で位置づけられる歴史に照らしながら沖縄空手と場所の関わりを整理する。次に、沖縄からの海外移住による空手普及の事例と沖縄空手会館が実施した海外の空手家へのアンケート結果をもとに、沖縄空手は越境する空手家に何をもたらすのかを考察する。

2. 場所を分かち繋げる文化

場所が文化を形成するとの捉え方が顕在化するの、人々の移動や他者接触によって文化が変容する時である。文化の変容が進むほど、人々はその文化の起源にこだわり、文化は場所と起源に結び付けられるようになる。例えば、植民地化により土地を追われ周縁化された先住民は自らの民族アイデンティティの表明を伝統文化や土地との結びつきを通して行ってきた。多くの先住民にとって土地は自らが植民地支配者より先住する証であり、自らの社会と文化の基盤でもある。このような文化の場所との関係は筆者が研究してきた仏領ポリネシアのイレズミにも見出せる（桑原 2022）。仏領ポリネシアは沖縄とは異なる歴史を歩むが大国に併合された点では重なり、場所に関わる政治性や歴史性を考える上で参照するに適した事例であろう。

マルケサスのイレズミと場所

フランスの海外県である仏領ポリネシアは5つの諸島から成り、現在、政治経済の中心であるソサエティ諸島タヒチ島ではイレズミが盛んに彫られている。タヒチ島では18世紀にキリスト教伝道が開始され、イレズミの施術は禁止された。1970年代から文化復興運動が起こり、ポリネシア人は自らの民族アイデンティティを言語、ダンス、工芸などの伝統文化で示し、フランスとの違いを強調することで植民地支配に抗してきた。イレズミも伝統文化の一つとして、とはいえ他の文化形式とは異なり身体に彫り込むことから、ポリネシアの身体性を表明する強力な身体装飾となった。

フランスによる領土化以前は5つの諸島は個別に社会を築き、文化も共通する部分を持ちながらもそれぞれ特徴があった。イレズミも諸島ごとに文様と様式が異なっていたが、復興時から現在に至るまで仏領ポリネシア全域で最も彫られてきたのはマルケサス諸島の文様である。19世紀末から20世紀初頭にかけてマルケサス諸島を訪れた民族学者達が素描や写真で文様を記録したことで復興しやすくなり、幾何学文様と形象文様で組まれた独特な様式が現代のポリネシア人と海外のタトゥー／イレズミ愛好家を魅了したからである。マルケサスのイレズミは、文化復興運動の文脈ではフランス文化とは異なるポリネシア文化の象徴となり、仏領ポリネシア諸島内の政治的文脈ではタヒチ島の集権化へ不服を抱くマルケサス人が他諸島から自らの諸島を差異化する時のマルケサス文化の象徴となる。一方で2000年以降、ポリネシアの島々ではタトゥー関連イベントが度々開催され、異なる島々の彫師の間での交流が盛んになった。複数のポリネシア文様が組み合わされたハイブリッドなイレズミが彫られ始め、マルケサス文様はその重要な構成要素になった。ポリネシア全域にわたる政治的連携を語る文脈では、マルケサスの

イレズミはポリネシアの島々を繋げる紐帯になった。

このように、マルケサスのイレズミは諸島間の政治経済的な関係において文様や様式の特異性をもってマルケサス諸島の人々を他の諸島から差異化し、ポリネシアの島々との連帯を目指す際にはハイブリッドなイレズミに組み込まれてポリネシアの人々に共通する印として肌に刻まれる。沖縄空手においても、沖縄内の流派・道場の関係、本土空手との関係、海外の道場・空手家との関係といった異なる地理的括りごとに同様の差異化と統一化が起こっていないか。以下では沖縄空手の近年の動向を整理し、沖縄空手の場所に関わる側面を考察する。

沖縄空手と場所

沖縄空手は、首里手は首里城周辺、泊手は泊港周辺、那覇手是那覇港周辺のように、地域差が流派の特徴となり発展した。20世紀半ばまで各流派を束ねる組織は存在しなかったが、沖縄空手の継承と国際的な普及を図るために、1956年に上地流・剛柔流・小林流・松林流が「沖縄空手道連盟」を結成し、1967年に松林流の長嶺将真を初代会長として「全沖縄空手道連盟」が設立した。

空手の本土への普及は1922年に船越義珍が沖縄から東京に渡り指導し始めたのが契機となる。船越は沖縄県師範学校出身の儀間真謹と講道館で演武を行い、その後も東京に残り、現在の慶応義塾大学や東京大学などに空手研究会を作り、1940年には松濤館と名付けられた道場を雑司ヶ谷に開設した¹ (新垣 2011: 387-388)。その後20年かけて道場数と空手人口を増やし、1964年には本土の空手道を統括する「全日本空手道連盟」が設立し、試合制度の整備や競技ルールの改良などに重点を置きながら空手の競技化を推進した。

1981年に沖縄での国民体育大会（国体）の開催が決まり、空手も競技種目に含まれた。沖縄空手家には国体に出場するために「全日本空手道連盟」への加盟が求められた。競技空手はルールに基づき相手と技の優劣を競うが、沖縄空手は何よりも護身術であり自己鍛錬法である。その違いから、沖縄空手家の間では「全日本空手道連盟」への加盟をめぐる賛否が分れた。「全沖縄空手道連盟」は加盟反対を選び、賛成の立場を取った空手家が「全沖縄空手道連盟」から脱退し1981年に「沖縄県空手道連盟」を設立した。以降、「沖縄県空手道連盟」は競技空手と融合しながら、世界大会に出場する選手を育成していった。このように、いかに競技空手との関係を持つかによって、沖縄空手の流派・道場は特徴づけられていった。

¹ 船越の流派は後に本土空手の4大流派の一つである松濤館流となる。

沖縄空手家達が流派・道場の在り方を模索する過程においてさらに空手組織が設立した。1982年には沖縄空手と古武道の継承に危惧の念を抱き、それらの文化遺産としての価値を重視しながら継承すべきとする空手家達が「沖縄空手・古武道連盟」を設立した。1993年には「沖縄空手道懇話会」を前身とする「沖縄県空手道連合会」が設立し、空手関連組織の団結を唱え、空手の発祥地としての沖縄を世界に発信し始めた。

国際大会の開催やさらなる国内外での振興を視野に入れた空手家達からこれら複数の沖縄空手組織の統一を求める声上がり、2008年2月には当時の沖縄県知事仲井眞弘多を会長として「沖縄伝統空手道振興会」が設立し、「全沖縄空手道連盟」、「沖縄県空手道連盟」、「沖縄空手・古武道連盟」、「沖縄県空手道連合会」が本振興会のもとに統一した。2009年には「沖縄伝統空手道振興会」は設立記念事業として沖縄伝統空手道世界大会を開催し、その後も、空手の日記念演武祭や沖縄空手国際セミナーを行ってきた。2014年7月には沖縄空手の世界遺産登録検討委員会が発足した。2016年4月には、沖縄県は文化観光スポーツ部に空手振興課を設置し、2017年3月には沖縄空手会館を開館した。2018年8月には第1回沖縄空手国際大会、2022年には第2回沖縄空手世界大会が開催され、各流派の演武が披露された（沖縄空手案内センター 2023）。

このような沖縄空手の近年の動向からは、沖縄空手家達による競技空手との関係における沖縄空手の位置づけと伝統の継承と体系化への取り組みが浮き彫りになる。沖縄空手の各流派は沖縄内では地域の道場を基盤に他の流派・道場との差異を認めながら発展した。競技空手と本土空手に対して流派や組織が統合するが、国際大会などの各種空手大会ではそれぞれの流派の師範による演武が披露されている。複数流派を包摂しながらの統合により、沖縄内外の空手家や空手関係者に沖縄空手の豊かさと沖縄という場所との繋がりを再認識させながらの振興が進む。では、空手家の海外への越境はこのような沖縄空手と場所の関係にいかなる影響を与えてきたのであろうか。

3. 空手家の越境

沖縄空手の越境に着目した研究は空手家の移動・越境の研究であり、近代の国際経済秩序下の移民と観光の研究になり得る。しかし、本稿は経済的側面ではなく、空手と空手家の移動・越境による沖縄空手文化の形成と変化に焦点を当てる。沖縄空手をめぐる移民と観光の両方に通奏低音で流れるのがルーツ・起源である。海外在住の沖縄出身者が自らの民族的ルーツを、空手ツーリズムで来沖する空手家が自らの空手の起源を、いかに沖縄空手に見出そうとするのが本稿の次の問いである。

海外に移住した沖縄の人々は時代と移住先によって異なるディアスポラ経験を持つ。

多くが自らを沖縄や移住先の同郷者達に関連づけるために、ウチナーグチ（沖縄語）やエイサーや沖縄料理に自らの沖縄のルーツを見出そうとする（白水 1998, 2008）。移住先で異なる文化背景を持つ人々と混淆する文化に対峙するなかで、また沖縄出身者自らも移住先でローカル化するなかで、沖縄のルーツを確認することは沖縄出身者のウチナンチュ・アイデンティティの形成を後押しする。上記文化と同様に空手にも、海外に在住する沖縄出身者達は自らのルーツを求めたのではないか。

マッカネルは観光を真正性（authenticity）の探求であると論じる（MacCannell 1973）。文化の真正性は文化の混淆や変容が起こるなかで起源や伝統に関連づけながら探求されるのであるなら（Wang 1999：350-351）、観光の文脈において沖縄空手の何が真正性として求められるのか。ハイハムとヒンチはスポーツ観光で求められるのは真正な「モノ」ではなく「経験」という（Higham and Hinch 2018：73）。「経験」という点では、世界各地においても空手家は各流派の型や精神性を研究し鍛錬でき、今では動画やオンラインセミナーを通して沖縄空手の型を学べる。自国での空手実践に欠けるものがあるならば、「沖縄」における「沖縄の師範」の指導を受けながらの稽古であり、海外の空手家はそのような稽古を真の沖縄空手の経験として求めるのではないか。以下では、空手家の越境に焦点を当て、沖縄空手におけるルーツ・起源の探求を考察する。

沖縄から海外への越境

1993年から沖縄に在住するフランス人空手家ミゲール・ダルーズ氏は2005年から日英の二か国語で『沖縄空手通信』を発行し、2017年から海外各地の沖縄空手の道場を紹介する記事「週間沖縄空手」を『沖縄タイムス』に連載してきた。ダルーズ氏の記事は個性溢れる道場と空手家を描き出すが、ここでは敢えて類型化すると、沖縄空手の海外普及は4つに大別できる。一つは、沖縄から南米、ハワイや他のアメリカ各地、ニューカレドニアなどの海外への移民に空手家が含まれ、彼らが沖縄空手を現地で指導したことでの普及である。また、フィリピン人などの出稼ぎ労働者が沖縄滞在中に空手を習得し、帰国後に母国で空手を指導した。さらに、インド人やフィリピン人がアラブ首長国連邦、クウェート、サウジアラビアへ移住した場合など、既に空手が紹介されていた国の空手家が移住先で沖縄空手を指導し普及した。もう一つは、ヨーロッパやアフリカに多い事例であるが、本土空手（主に松濤館流）がまずは紹介され、本土空手の道場で修業していた空手家が沖縄空手に転向しての普及である²。さらに、アメリカ兵が沖縄の米軍基地

² ケニア、ジンバブエなどのアフリカの一部地域への本土空手の紹介は海外青年協力隊による。

駐屯中に沖縄空手を習得し、帰国してから空手を指導したことで普及である。最後に、沖縄空手団体が海外から要請された指導者派遣に応じ、沖縄の空手家が各地を訪れて演武や指導を行ったことを契機とした普及である。このように、沖縄空手の海外普及の経緯は地域や個々の事情に特徴づけられるが、沖縄の歴史に関わるのは移民と米軍基地設置を起因とする普及であろう。ここでは紙幅の都合上、沖縄からのハワイへの移民による沖縄空手の普及のみを概観する。

戦前、沖縄からブラジル、ペルー、メキシコ、フィリピンなどへの移民があり、その嚆矢がハワイへの渡航であった。1900年には官民移民として26人が、1903年には自由移民として40人がハワイに渡航した（遠藤 2015：31-32）。その後も呼び寄せで沖縄からハワイへの移民は続き、1940年時点でハワイ在留者数は1万3146人であった（石川 2022：86）。沖縄出身者は来島当初はサトウキビ農園労働者となり、やがて養豚業や飲食業に携わるようになった。本土からの官民移民開始より15年遅れであり本土出身者のコミュニティが構築した後であったため、本土出身者と沖縄出身者の間には軋轢や分断が生じ、後者に対する差別もあった（遠藤 2015：33-34；白水・鈴木 2016：88-91）。

第1回目渡航者のなかに空手を使って喧嘩をしていた者がいたとの証言もあるが（鳥越 2013：92）、表立ってハワイに沖縄空手が紹介されたのは1927年に屋部憲通によってであるとされる（新垣 2011：377；ダルーズ 2023：82）。首里手の松村宗棍に師事した屋部憲通は陸軍教師団に入団し下級将校を養成し、日清戦争と日露戦争に従軍した（新垣 2011：374）。長男の移住先であったロサンゼルスに8年間滞在した後、1927年に帰国の途中で訪れたハワイに9カ月滞在し、ホノルルとカウアイで空手を沖縄出身者に指導した。また、空手家であり、海軍退役後に衆議院議員となった漢那憲和とマウイ島を訪れた。先の戦争での活躍から「屋部軍曹」と称えられた屋部と沖縄出身者として初の海軍兵学校入学者であり衆議院議員であった漢那の訪問はハワイの沖縄出身者コミュニティから歓迎され、二人は空手の演武を披露した（新垣 2011：376-377）³。

戦中のハワイでは、経済界を牛耳っていた本土出身者達が強制収容され不在であったなか、小規模な経済活動を行っていたために収容を免れた沖縄出身者達が経済界に台頭していった。戦後は、沖縄出身者と中堅クラスの本土出身者がハワイ日系社会を率いた（白水・鈴木 2016：94-97）。もはや戦前のように日系社会における沖縄出身者への差別もなかった。では、いかに沖縄空手はハワイに根付いていったのであろうか。現在、ハワイにおいて沖縄空手を継承する少林流ハワイ聖武館の歴史を紹介したい。

1952年、首里手の喜屋武朝徳の後継者であった島袋善良は北谷町に道場を開き、1962

³ さらに、1932年から翌年にかけて本部朝基と宮城長順もハワイを訪れ、空手を指導した（ダルーズ 2023：82）。

年から少林流聖武館として少林流を指導した（国際沖縄少林流聖武館空手道協会2023）。その島袋に従事したのが照屋正一であった。1945年に満州に生まれた照屋は幼少期に両親の出身地沖縄に移った。琉球大学卒業後は銀行に勤めたが、1970年にハワイに渡り、複数の仕事を経て、食品会社の経営者として成功を収めた。照屋はハワイ渡航後すぐにオアフ島のモイリイリ・コミュニティセンターで空手指導を始め、少林流ハワイ聖武館を開き、以後、沖縄出身者に限らず多くの空手家を育てた（ダルーズ 2023：82）。2015年に照屋は45年間の空手指導の功績が認められて、ハワイ沖縄連合会からコミュニティの発展に貢献した人に与えられる「レガシーアワード」を授与された。2015年12月9日の沖縄タイムスの記事において照屋は「『受賞が沖縄の若い人を勇気づけることになれば』と願っている。沖縄は政治的に難しい状況にあるが、現状だけを見つめるのではなく、『世界がふるさと』というくらいの広い視野でチャレンジしてほしい』と呼びかける（沖縄タイムス2015）。

戦前戦後ではハワイの沖縄出身者にとって沖縄空手が持つ意味が異なった。戦前、日系社会の下位に位置づけられた沖縄出身者にとって、同胞の成功者であった屋部と漢那は日系社会に向けての誇りであり、沖縄文化であると共に軍の訓練にも組み込まれていた空手は困難を経験していた沖縄出身者を鼓舞したであろう。戦後、ハワイの日系社会で力をつけた沖縄出身者二世にとって沖縄空手は同郷者を繋ぎ、ウチナーンチュとしてのアイデンティティ形成に貢献した。二世にとってルーツは文化が変容する前の始点つまり伝統に求めるのではなく、変容する過程も含めての沖縄との繋がりを意味する。

海外に普及した沖縄空手は道場と修練者を増やし、各流派の師範は海外の道場を指導のために訪れ、さらには、海外から沖縄の道場で稽古を受けに多くの空手家が来沖するようになった。では、海外から沖縄へといった空手家の移動からはいかなる起源の探求が浮かび上がるのか。

海外から沖縄への越境

海外の空手家のなかには沖縄の道場での稽古を希望する人が少なくない。所属する道場が沖縄の道場と繋がりが無い場合には、海外の空手家と沖縄の道場を繋げる仲介役が求められた。先に紹介したダルーズ氏は2011年から任意団体「沖縄伝統空手総合案内ビューロー」を設立し、海外の空手家を各流派の道場に結び付ける活動を行ってきた。2022年からは沖縄空手案内センターの一員として沖縄空手と海外の空手家を繋ぐ事業に力を注ぐ。ダルーズ氏によると、1990年代から海外各地の様々な流派に属する空手家が道場における師範からの指導を求めて沖縄を訪れるようになり、コロナ禍前は年間7000人にのぼった。彼らの沖縄滞在は平均して10日間から2週間であったという（2022年9

月インタビュー)。

沖縄空手会館は一般社団法人沖縄伝統空手道振興会の協力のもと、2021年6月14日から8月12日まで沖縄の道場と繋がりのある海外の空手家に向けてGoogleフォームでアンケート調査を実施し、181人から回答を得た。このアンケート結果から、海外の空手家による沖縄空手の評価と彼らが空手の経験に求める真正性が現出する。ハイハムとヒンチはスポーツ観光が経験的な真正性を推進する要素として、不確実な成果 (uncertain outcomes) を持つこと、パフォーマンスの一部として表示 (display as part of performance) されること、身体的基盤と全感覚的な性質 (physical basis and all-sensory nature) を持つこと、自己育成とアイデンティティ形成 (self-making and the construction of identity) を促すこと、コミュニティを発展させる傾向 (propensity to develop community) があることを挙げる (Higham and Hinch 2018: 73)。またウォンは、真正性を内面的 (intra-personal) と対人的 (inter-personal) に分け、前者が身体感覚と自己アイデンティティに、後者は家族の絆と活気に満ちたコミュニティに見出せるとハイハムとヒンチに重なる指摘をする (Wang 1999)。以下、ハイハムとヒンチとウォンが提示したスポーツ観光に求められる経験的な真正性を踏まえながら、アンケート結果を検証していく。

始めに以下のような、沖縄の師範が海外に赴いての指導あるいは沖縄の道場の海外の空手家の受け入れの重要性を強調するコメントがあることを指摘したい。これらは沖縄の師範による稽古、さらに理想を言えば、沖縄での稽古こそが真の沖縄空手の経験に繋がると海外空手家が考えていることを示す。

沖縄空手の修行には、伝統的な沖縄空手の先生に従事し、空手発祥の地について知識を深め続け、沖縄を訪れて沖縄の真の精神と歴史を理解することが必須だと信じる。(R. C.)

海外の空手家は、沖縄空手が身体鍛錬であると共に精神鍛錬であることを強調する。つまり「身体的基盤と全感覚的な性質」を持ちながらも、「内面的な経験」であるとする。沖縄空手の精神の体現化 (embodiment) は空手の身体的な経験に含まれ、そこに「自己の育成」と空手家としての「アイデンティティの形成」が見出せる。関連するコメントを紹介する。

沖縄空手が心、身体、人格を育てることで平和と尊厳を促進すると信じる。自己啓発に重点を置くことで生徒の人生を豊かにし、地域や家族にも良い影響を与え

る。沖縄空手は多様性、忍耐、努力を奨励し、自分自身と他人を尊重する。沖縄の先生方はカナダの生徒達を空手ファミリーの一員として受け入れてくれる。私達は40年以上にわたって、上地流の伝統的な型とそれが体現する信念を教え、広めることができ、光榮に思っている。伝統的な沖縄空手、その原則、価値観、利益を未来に向けて推進し続けることを期待する。(N.D.)

空手は自己防衛を学ぶ以上のものである。空手は身体的、精神的、霊的な幸福を包含する生き方である。また、伝統空手はスポーツ空手とは異なる。ビジネスの成功のためにあまりにも多くの道場が開設されてきた。真の沖縄空手道を教える道場を認定する沖縄の管理団体があると良い。(R.P.)

沖縄空手は実践者や愛好者に多くを与えると確信している。沖縄空手の文化的、哲学的、武道的価値観は実生活のあらゆる場面で伝えられる。さらに沖縄空手は武道の7つの美德を教え、人間の総合的な発展を助ける。空手哲学は人々がより良い人間になり、より強く、健康になるのを助け、その全ての恩恵は現在と未来の世代に保持され、継承されるべきである。(S. N.)

武道全般に共通する強固な師範と弟子の関係は沖縄空手においても顕著である。海外の空手家にも濃厚な師弟関係は受け継がれ、沖縄の道場と師範との長年にわたる交流について熱心に語る空手家が多い。アンケート結果には師範の人柄だけでなく沖縄の人々にも魅了されていることを示すコメントが多く、彼らが師範との関係に「家族の絆」を見出し、「活気に満ちた」沖縄のコミュニティからの受け入れを経験していることがわかる。

初めて沖縄を訪れた1996年から、沖縄の人達のホスピタリティに驚かされてきた。初めて順道館を訪れた時の宮里先生の忍耐強さと励ましを忘れることはできない。私を道場に受け入れてくれた先生方の気さくさと思わず知らずの私に空手道を教えてくれた善意である。(J.H.)

1984年から沖縄の空手（上地流）を稽古してきたが、それが私の人生になった。空手の伝統的な稽古法に非常に興味があり、できる限り師範から学ぼうと9回沖縄を訪れている。また、沖縄の文化や友好的で温厚な人達が大好きだ。(J. R.)

最後に「起源」の捉え方を示すコメントを挙げていく。海外の空手家には競技空手から始めて後に沖縄空手に転向したり、沖縄空手一筋であっても競技空手の動向を追ってきた人が少なくない。空手家のなかには沖縄空手は競技空手から差異化すべきと考え、商業的なプロモーションとは一線を引くことを希望する人々がいる。

スポーツ／オリンピックは健康や自己啓発のための伝統空手の敵である。子供達には多少の競争はあってもよいが、伝統空手とその方法を重視すべきである。世界中の空手実践者に沖縄伝統空手をもっと知ってもらいたいが、「空手・武道ツーリズム」という考えは好まない。一生に一度だけ沖縄を訪れる、空手の探究に興味のない人が多すぎて彼らが道場の時間を占領し、数年に一度、多くの時間と金をかけて師範から指導を受けようとする真剣な修練者の稽古の機会を奪っている。(T.P.)

空手の普及はよいが、沖縄のどの道場が空手を世界に普及させるかを管理すべきであろう。現在、道場の幾つかは伝統的な道場ではなく、沖縄の基盤や文化を自らの利益のために利用している。(E.K.)

伝統を維持し、商業的や経済的利益重視にならないことを望む。沖縄の人々が英語等を学ぶのではなく、外国人が沖縄の言葉や慣習を学ぶことを望む。沖縄文化がそのまま継承されることを望む。(P.B.)

海外の空手家はユネスコ無形文化財登録やさらなる沖縄空手の普及や振興に期待を寄せる一方で、競技空手との融合や商業的に向かうことには懸念をみせ、「古き、良き伝統」を維持すべきとの意見も少なくない。ここからは、海外の空手家は空手の起源にこだわりながらも、彼らの沖縄滞在はあくまでも経験的な真正性の探求に費やされることがわかる。

4. おわりに

空手家向けの観光を取り扱う那覇市にある旅行会社Ageshio Japanは海外の空手家を道場に繋げ、各種ツアーを催行してきた。空手稽古の合間をぬって、沖縄の空手・古武道を体験できるプログラムを提供する。その一つとして「沖縄空手聖地巡礼ツアー」がある。以下、2022年9月、コロナ禍で海外空手家が参加するツアーの催行がないなか、Ageshio Japan代表上田健次郎氏が筆者達のために催行してくれた典型的なツアーの旅

程を辿ろう。

始めに船越義珍の顕彰碑が建つ奥武山公園東部に位置する沖宮を訪れ、次に剛柔流の東恩納寛量と宮城長順の顕彰碑がある松山公園を訪れた。松山公園には中国福建省から閩人三十六姓と呼ばれる人々が渡来し久米村を築いたことを示す、久米村発祥の地の石碑がある⁴。三つ目の訪問地であった真嘉比墓地には首里手の武人松村宗棍とその弟子糸洲安恒の墓があった。墓に入り、顕彰碑の前で手を合わせた。途中、空手道衣、試合用プロテクター、鍛錬具、古武道の武具などを扱う空手用具専門店の守礼堂に寄り、最後に、沖縄剛柔流空手道師範で空手研究家でもある外間哲弘氏の道場に併設する沖縄県空手博物館を訪れた。外間氏から解説を受けながら沖縄空手に関する展示を見学し、その後、多くの海外の空手家を稽古に受け入れてきた話を伺った。

空手聖地巡礼ツアーは各流派の祖の顕彰碑及び墓を主たる訪問地として巡り、沖縄空手の伝統と歴史を重視する海外の空手家の関心に応える経験を提供する。海外の空手家にとっては、沖縄空手の歴史は知識として習得するのでは充分ではなく、顕彰碑と墓を訪れる経験を通して自らの流派を、沖縄空手を起源とする系譜上に正統な空手として位置づけることが重要なのである。そこに型や精神性の習得に留まらない、海外の空手家による「空手発祥の地」沖縄に自らを繋げる実践の一つが浮かび上がる。

空手聖地巡礼ツアーのみならず海外移民の歴史と海外の空手家へのアンケート結果からも、海外在住の沖縄出身者が自らのルーツを、海外の空手家は自らが実践する流派の起源を沖縄空手を通じて探究していることがわかる。このような伝統と起源を辿り自らの流派の正統性を沖縄空手との関係で確認することは、「文化は常に創造され変容し続ける」という文化研究に通底する捉え方とは一見相反するかのように見える。しかし、歴史や起源を含めた空手の伝統を継承することは、空手家による日々の鍛錬や師範との関係など個人的な経験の積み重ねから実現されるのではないか。加えて、沖縄空手が何であるかの対話や実践を沖縄内に留めず外部に開こうとする沖縄の空手家・空手関係者の動向に、伝統と共に既に国際化している空手の側面も重視しながら、沖縄内外における沖縄空手の文化のさらなる発展に努める彼らの姿勢を見出せるのではないか。沖縄空手は伝統継承の動的な側面を示してくれる格好の文化である。

謝辞：本研究は金城学院大学人文・社会科学研究所共同プロジェクト助成「沖縄の空手の聖地化に関する学際的研究」（共同研究者：加瀬佳代子）を受け、沖縄空手案内センターの協力を得て2022年9月4日～7日及び2023年2月9日～12日に沖縄で、2022年10

⁴ 沖縄空手の成立に影響を与えたのは、型の名称から中国福建省の武術であるとの見解がある。

月と12月に愛知で調査を実現しています。上原邦男氏、仲西常起氏、Miguel Da Luz氏、喜友名朝考先生、池宮城政明先生、Filippo Gaspardo氏、垣花弘光先生、山田英喜先生、上田健次郎氏、外間哲弘先生、桃原直子氏にご教授頂きました。とりわけ、テーマが空手家の越境であるのにコロナ禍で来沖する空手家がなく困っていたなか、アンケート結果をご提供頂き筆者に分析することをお許し下さった上原センター長に感謝いたします。

参考文献

新垣清 (2011) 『沖縄空手道の歴史』 原書房.

石川友紀 (2010) 「戦後沖縄県における海外移民の歴史と実態」 『移民研究』 6 : 45-70.

---- (2022) 「沖縄移民研究の総括と課題」 『移民研究』 18 : 83-91.

遠藤美奈 (2015) 「ハワイの沖縄系移民による芸能活動と沖縄」 沖縄県立芸術大学博士論文.

沖縄空手案内センター (2023) 「主要組織及び施設」 (<http://okic.okinawa/local-network>, 2023年1月23日閲覧).

沖縄タイムス (2015) 「北谷出身の照屋さん ハワイ人間遺産に登録 沖縄空手道普及40年」 2015年12月9日 (<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/21724>, 2023年5月29日閲覧).

桑原牧子 (2022) 「顔を横切る黒い帯—マルケサス諸島の文様の変容」 山本芳美、桑原牧子、津村文彦編 『身体を彫る、世界を印す—イレズミ・タトゥーの人類学』 春風社, pp. 21-50.

国際沖縄少林流聖武館空手道協会 (2023) 「小林流聖武館歴史」 (<https://seibukan.info/history.html>, 2023年5月3日閲覧).

白水繁彦 (1998) 『エスニック文化の社会学』 日本評論社.

---- 編 (2008) 『移動する人びと、変容する文化』 御茶の水書房.

白水繁彦・鈴木啓 (2016) 『ハワイ日系社会ものがたり』 御茶の水書房.

ダルーズ・ミゲール (2022) 『ミゲールの世界の沖縄空手事情』 沖縄タイムス社.

鳥越皓之 (2013) 『琉球国の滅亡とハワイ移民』 吉川弘文館.

Higham, J. and T. Hinch (2018) *Sport Tourism Development*. Clevedon: Channel View Publications.

Hinch, T. and E. Ito. (2008) "Research, Lifelong Sport, and Travel: Sustainable Sport Tourism in the Prefecture of Okinawa". *Research, Lifelong Sport, and Travel*. 15(2): 1-13.

MacCannell, D. (1973) *The Tourists: A New Theory of the Leisure Class*. New York: Schocken.

Wang, N. (1999) "Rethinking Authenticity in Tourism Experience" *Annals of Tourism Research*. 26(2): 349-370.